

1. 「シンポジウム・史料論のいま」（九州歴史科学研究会共催）

日時：2005年7月16日（土）

場所：西南学院大学学術研究所 大会議室

報告：岡崎敦 「総論・文字史料」

桃崎祐輔 「考古学史料」

西谷郁 「映像史料」

宮本なつき 「オーラル史料」

九州歴史科学研究会との共催で、「史料論のいま」をテーマとするシンポジウムが開催された。

九州歴史科学研究会は、福岡を根拠に、歴史学の多様な領域の研究者を糾合しながら、さまざまなテーマでシンポジウム、研究会を開催している。「西欧中世史料論研究会」においても、異なる領域との比較や共同研究が、重要な目標としてかけられており、今回は、両者の協力のもと、4つの領域から報告が準備された。史料論のような歴史学方法論にかかわる諸問題の検討にこそ、領域を横断した議論の場が必要なのである。当日は、花田洋一郎氏の司会のもと、まず各報告が行われ、その後フロアを交えての総合討論が設定された。

今回のシンポジウムのねらいは、以下の通りである。

第一に、いまなぜ史料論なのか、という問いを、諸学界やそれらを取りまく社会状況全般という文脈のなかで再検討する。

第二に、異なる史料類型の特殊性と、それらの間の史料情報処理の次元での相違について吟味する。たとえば、「文字」は本当に「オーラル」よりも「信頼に値する媒体」なのであろうか。「映像」は「より客観的に事実を伝える」のだろうか。

最後に、歴史家のいとなみを、実証研究の可能性という観点から省察することである。

以下は、各報告者が、当日の報告をもとにあらたに書き下ろしたものである。

総論

—なぜいま史料論か—

岡崎 敦

0：なぜいま史料論か

20世紀の最後の十数年に至って、それまではもっぱら文明の大理論をはじめとする歴史解釈問題として論じられてきた歴史理論において、史料と史料情報の認識に関わる諸問題が重要な論点として浮上するに至った。ここでは、その背景を概観するとともに、「史料論」と呼びならわされている問題群がどのようなものであり、史料類型の多様性との関係では、どのような一般性を有するのかについて考えてみたい。

史料論の浮上は、歴史学内部の事情と外部の状況の双方に、その背景を求めることができるように思われる。歴史学内部においては、「歴史認識論争」とポスト・モダン論者による実証批判が大きなインパクトをもたらした結果、歴史学の実証基盤についての省察が要求されるに至った状況が大きい。また、「記憶」や「言説」、「わが物にする」読書行為などの新しい問題系が、本格的に歴史学に取り込まれ、史料情報処理についての斬新な方法論が練り上げられてきていたことも想起すべきであろう。最後に、伝統的史料学においても、モノとしての史料への関心（抽象的テキストから実践行為の対象としてのモノ）や、自然科学との協同、新しい史料類型の「発見・トピック化」などの動きが加速してきたことが、急速に歴史学の相貌を変えつつあったのである。

他方で、学界の外に目を移せば、どの領域においても、学問の成立基盤自体を問う動きが活発化していることに気づく。たとえば、人類学者の発見する「構造」をめぐる研究者の視線と「事実」との関係や、博物館展示の「客観性」問題等は、歴史学が直面しているものと本質的に同じ性格を有していると考えられる。

また、議論を呼んだ構築主義についても、学問の脱構築の必要性自体は、受け入れられているように思われる。アカデミズムの外部からの、たとえばジェンダー論からの批判に加えて、歴史学内部においては、ドイツ歴史家論争がそのもっともラディカルな表われとして特筆される。近年の一般的な傾向として、大理論に対する忌避観が拡大していることも、冷戦構造の崩壊のみならず、既存の図式に個別をあてはめて「達成率」を判定するような学問観への懐疑によるところが、大きいように思われる。一言で言うなら、研究の「立場性」が強く意識されるようになった結果、学問があらゆる意味で自明ではなくなったのである。

最後に、グローバル化しながらも、その内側では多様な人間集団が固有のアイデンティティ構築のために闘争する現代社会においては、従来支配的であった普遍主義的な文明観、歴史観が相対的にその有効性を下げ、かわって

相互依存・共犯関係などの新しい論点が提出される傾向にあることも、問題関心の枠組みの変容を導く要因として挙げられうるであろう。

ここでは、「史料論のいま」の意味を再考するとともに、史料論について考えることが、歴史学のいとなみ自体を省察するための大きな一助となることを示したい。

1：史料論とはなにか

「史料論」とはなにか、という問いは、実は回答困難な問いである。一般的・静態的に定義するよりも、歴史学の実践のなかで、絶えず新たなかたちで現われる問いの総体として理解したいが、ここでは、とりあえず、以下の三つの諸相としてまとめてみたい。

第一は、史料の存在や機能等の諸問題を、それ自体として、歴史的関心から検討することである。史料は、単なる情報の器ではなく、それ自体が歴史情報の一部である。第二は、史料情報読み取りについての新しい方法論の提示・実践というレベルがある。新しい問題関心が、新しい史料情報の読み取りを可能とする例に、歴史家は多く立ちあってきた。最後に、史料と歴史学の関係をめぐる省察という問題、すなわち、史料研究の脱構築作業がある。

第一の「歴史現象としての情報体＝史料」については、史料（類型）の存在や伝来の意味等が、それ自体として議論の対象となる。史料は、なんらかの現実を不完全なかたちで代表（表象）しており、部分性、主観性、複合性等の性格の検討は、個別のテキスト内容の批判以前に不可欠である。さらに、史料の表象現象が、そこで語られている内容＝対象とどのような関係にあるのかについての諸問題は、通常の史料批判を越える射程を有する。

第二の「歴史現象の史料化」は、「史料とは、歴史家が、過去の痕跡をそのようなものとして認識することによって、はじめて存在するものである」という認識にはじまる。そして、このような過去の断片から、どのようにしてその背後やコンテクストを復元できるのかについて実践的に考察せねばならない。理論的には、「不完全な」史料情報をいかに積上げて完全な復元に至る保証はないが、たとえば、史料表象の次元を上げることで、史料のより繊細な読み取りが可能となりうる。

最後の「史料研究の脱構築」とは、たとえば、史料収集・刊行事業を規定している歴史観や方法論のあり方、史料読解が可能となる諸条件の理論的考察等が念頭に置かれる。西洋史学を含む日本の西洋学では、学者の「投企」が賭けられる「解釈」と、「誰がやっても同じ実証」という区別がしばしばたてられるが、実は、実証の性格自体、十分な検討が行われてきたとは思えない。実証主義なるものは、本当に「西欧近代に特有な（時代遅れの）世界観に規定された方法論」にすぎないのかどうかについても、あらためて検討されるべきであろう。

2：史料（類型）の多様性と処理

歴史家の問題関心の多様化は、過去の痕跡としての史料（類型）の多様化を押し進めてきた。今回のシンポジウムでも、「文字」、「映像」、「オーラル」という三つの異なる類型が俎上にのせられている。これらの間には、どのような性格の相違があるのだろうか。

たとえば、「文字」史料と「オーラル」史料のどちらがより信頼性が高いのか、という問いは、本質的に誤った問いであると考えられる。すべての過去の痕跡は、なんらかのコンテクストのなかで、固有のコードのもとに編纂され、ある状況のもとで現在伝来してきたのであり、一般的なかたちで、それぞれの史料情報の「信頼性の多寡」を云々することはできない。すべての史料（類型）は、それぞれのやり方で「現実」なるものを表象しているという意味で、本質的な違いはないといえる。史料論にとって可能なのは、それぞれの史料の存在と伝来、機能のコンテクストとコードを解読し、それらを、各々の生成と受容の「場」との関係で、より厳密に位置づけることだけである。そのためには、一方では、モノとしての史料の分析が、他方では、自然科学も含む関連諸科学の成果と方法が、ますます重要と認識されているのである。

他方で、各史料（類型）が異なる取り扱いをうけねばならない状況も、想定することはできる。考古学が典型的であるように、細分化した現代諸科学は、特定の史料類型の検討に特化する傾向もあるが、これは、必然的に利害集団としての学界を生み、それぞれのジャルゴンと固有の問題関心を自己目的的に発展させるであろう。また、オーラル史料研究は、「現代史」というリングでのパワー・ポリティクス現場に置かれやすい。史料研究も、そのような学問を取り巻く権力の強い磁場のなかに置かれていることは、認識せねばならない。

これに対して、史料（類型）それぞれの固有の性格が、重要な検討要素となる局面も存在する。たとえば、よく指摘される点として、史料の絶対量の問題がある。すでに述べたように、すべての史料現象を収集して、議論に組み込むことは実際には不可能であるが、歴史学の現場においては、「多すぎる情報」を前にしての「取捨選択」と、「少な過ぎる痕跡」の過剰解釈が常につきまとっている。他方で、いわゆる事実と呼ばれるものにも、モノ的事実と「歴史的」事実、事件的事実と構造的事実の区別が主張されているように、さまざまな類型を想定しうる。たとえば、封建制や荘園性といった概念は、文字史料からは「実証」可能でも、考古学的発掘調査からはどのように証明できるのであろうか。また、なんらかの事実について後から「語る」史料は、いわばメタレベルの史料情報だが、このような「物語」（解釈された過去）現象は、その背後にある「現実」の再編という契機を強く含むことが想定される。結果として、「言説」機能の強度とその射程によっては、特定の史料は、内容となる「現実」との距離が非常に大きいものとなる。言うまでもなく、その代表こそが文字テキストなのである。

おわりに

最後に、以上を前提として、史料論のいとなみを、やや一般化してまとめれば以下のようなだろう。

史料論は、より深くより豊かな過去の理解のために、過去の痕跡を最大限に読み取るよう努力することであり、そのためには、過去の痕跡の他者という性格をよくわきまえたうえで（野生の思考）、それら进行处理に必要な技術（文明の道具）を洗練させながら、恣意的な読みに安住することのないよう、終わりのない自己省察を続けねばならない。

学界や研究対象の違いによる、学問上の方法論や問題関心の相違は、より繊細な史料の読み取りを押し進めていくために、一面不可欠ではあるが、他領域の研究から学ぶことも当然重要である。この際、有利な情報のつまみ食いではなく、学問の性格や方法論上の諸問題についての相互理解の上で、個別の研究テーマについて論点の共有を目指す必要があるだろう。

最後に、史料論には、定まった方法論など存在しない。究極の真理を担う大理論をあらたに一つでっち上げるのではなく、個別の史料現象のより豊かな読み取りを可能とするための経験を共有することが求められている。

文字史料

—西欧中世における文字テキストと読書行為—

岡崎 敦

0：はじめに

過去の痕跡として歴史家がトピック化する現象として「史料」を考えれば、すべての史料類型のあいだには本質的な違いはないと考えられる。他方で、個々の史料は、その存在と機能の文脈において、「群」として把握された上で、それぞれに相応しい分析方法が必要であろう。この際、まず文字史料固有の諸問題が検討されねばならないと同時に、史料現象は個別の「場」でしか生成しない以上、文字利用についてもその具体的表われを通して議論することになる。ここでは、総括的議論をまず提示したのち、西欧中世史領域から具体例を引きつつ、各論を提示したい。

1：文字史料固有の問題はあるのか

文字は文明化の道具、すなわち不可逆的性格の変革をもたらすのであろうか。たとえば、「文字の権力性（お上の人民支配の道具）」については、たとえばレヴィ＝ストロースと川田順造との認識の違いが、判断の困難さを示している。文字が記憶秩序安定のための強力な媒体かどうかについても疑問が多い。口頭所作の社会に比べて、文字社会の方が「正確な情報」を常に伝達しているかどうかは、たとえば「正史」にかかわる諸問題を鑑みれば、ことの微妙さは明らかであろう。他方で、完全に文字化された社会などはまったく想像不可能であり、文字の世界は実際には非文字の世界と「一つになって」存在しているのである。

したがって、「文字史料」についても、他の史料（類型）と同じ方法論（史料の性格吟味）の原則が適応されるであろう。すなわち、内容に先立っての形式批判、情報の類型・性格の吟味等であり、文字の強い「言説」化機能を認めるにせよ、検討せねばならないのは、その生成と伝来のコンテキストとコード以外にはあり得ないのである。

最後に、史料類型間の相互関係という問題群がある。典型的なのは、口頭伝承の文字テキスト化という現象であろう。これら二つの史料（類型）は、それぞれの存在のコンテキストとの関係でまずは検討されるが、両者の関係という問題もまた、避けて通ることは出来ない。

2：文字化するということ

あるテキストは、そもそもどのような契機で文字化されるのであろうか。西欧社会は、12/13世紀を画期として本格的な文字社会へと突入したと見なされるが、その際、重要なモメントとなったのは、実務の現場であった。一方で、国家をはじめとする機構・組織の業務の制度化とルーティン化が、一定の量的水準に達した結果、「文書行政」が不可欠となった。他方で、私的な法行為が文字化されることによって効力を保証されるシステムが確立

した。この背景には、社会空間の拡大（コミュニケーション、交換、移動）、紛争を広域において上位レベルで調停する領域的権力の成長が想定される。ちなみに、この全般的動きを直接準備したのは、封建期における在地修道院をはじめとする教会による文書実践戦略であった。

つぎに指摘されるのは、口頭伝承の文字テキスト化である。同じく 12-13 世紀にかけて、北フランスを中心として、武勲詩やロマン、詩などのテキストが突然一定数出現するに至った。これらはみなその起源として口頭伝承が想定されながらも、文字テキスト自体については、その生成と受容の文脈を考慮した性格規定を行わねばならない。この際重要なのは、これらの「文学場」の形成を可能とするような社会的諸条件の再編であり、具体的には、内容のみならず、聞き手や作り手、採用された形式（言語やジャンルなど）等の諸問題が必須の検討課題となる。武勲詩を例にとれば、これは独立自由の封建領主を主人公としながらも、文字テキストに表現されているのは、これがすでに過去のものとなった 12 世紀の王権強化の時代に、彼らが置かれた苦い現実なのである。また、不倫を主題とするロマンは、キリスト教道徳だけでなく、貴族家門の論理や伸長する王権とも緊張関係にあり、それらは、ある種の教会人によってこそ書かれたと見なされうる。さらに、これらのテキストが、俗語で書かれながら、それはもはや「話し言葉そのまま」ではなく、「規格化された共通俗語」の性格を強く帯びていることも重要である。この意味では、文字化は、底辺の社会秩序の文字の世界への浮上（ばかり）ではなく、別の原理による再編でもありうるのである。

3：文字テキスト受容の背景

1200 年以後西欧社会が本格的なリテラシー社会に突入した、というとき問題となっている「リテラシー」とは、普通教育一般化以後のそれとは異なる「実践的」な性格を有している。口頭所作や複数の言語体の共存、およびそれらの使い分けを前提とする、職業と生活上の必要の範囲内でのリテラシー能力であり、経済と同じく、社会に「埋め込まれている」現象と見なされうる。

他方、リテラシーとは、単なる文字記号の解読能力以上に、なんらかのテキストを規範通りに解釈する能力を意味しているがゆえに、そこには特定のテキスト解釈を共有する共同体が現われる。「テキストの解釈共同体」については、文字と説教との相互関係など、固定的なリテラシー像からは遠いところからの考察が求められている。ここでは、広い意味でのコミュニケーション体系や微細な権力等の諸問題が参照されるべきだろう。

4：書物と読書行為

文字テキスト固有の問題としては、書物と読書行為が、大きな研究の諸潮流を構成している。中世初期の、ごくわずかのテキストを繰り返し、大勢で声に出して読む読書から、中世末期に現われる、大量の書物を、一人黙って読む行為への変容については、よく知られている。この結果として、書物の体裁（句読点、フォルマ、書体、目次、索引など）が大きく変わり、読書は、

ある種の情報処理行為へと変質する面を伴った。その舞台は、言うまでもなく大学である。大学は、史上初めて現われた、定められたカリキュラムと修学期間を経て、統一的試験によってその能力を「全般的に」保証する高等教育制度であり、聖俗官僚の養成機関として機能した。

おわりに

以上を、あらためて整理すれば、以下の通りである。

西欧社会が本格的な文字化社会に突入した結果、情報の体系的大量処理とそれを制御するシステムがあらわれ、急速に整備されたが、同時に、リテラシーレベルの多様化と複雑化が招来された。同一人物において複数のコードを使い分けることさえ、一部では一般化するのである。

他方で、文字と権力との関係は、自明ではない。確かなことは、文字が生活のすべてを律することなどありえないという事実であり、文字史料の分析においても、非文字媒体を考慮に入れることが望まれる。

以上を前提とした上で、文字史料には、その「表象」機能に関わる問題が、とりわけ重要視されるべき局面がありうる。この際、問われねばならないのは、「テキストはどのような現実を語っているのか」ではなく、「どのように語っているのか」であろう。

コトからモノへ
—古墳時代馬具研究の立場からモノへの回帰を論じる—

桃崎 祐輔

はじめに

安齋正人氏は、若い頃、石器実測での屈辱を跳ね返し、考古学界屈指の論客に大成して今日在るが、彼は『理論考古学—モノからコトへ—』（1994、柏書房刊）の中で、「私たちが考古資料から先史世界を叙述したり、あるいは先史世界観を構築しようとする場合、基本的に前掲の構図に従う。従って、考古資料から構築あるいは叙述された歴史は、そこで使われた高位の理論にあたる歴史観と、中位の理論に当たる考古学的モデルまたは作業仮説と、低位の理論にあたる考古学的経験則との間の論理的一貫性、及びモデル・作業仮説・経験則と考古資料との間の整合性、この二元的基準によって評価されるべきである。」と述べている。安齋氏の提唱した「モノからコトへ」というコピーは、今や考古学界の新しい合言葉となっている。

偏執狂的な遺物観察で古墳時代の円筒埴輪や銅鏡の研究に新展開をもたらしてきた川西宏幸氏は、「同型鏡考—モノからコトへ—」と題し、「本論は、遺跡や遺物というモノから出発して、歴史上の事象つまりコトへ至るための試みであり、立論であり、基礎的考察である」と弁じた上で、中国南朝から舶載されたと考えられる鏡と、これを踏み返したと考えられる鏡の相互関係を整理した（川西 2000）。

川西氏ほどのモノの達人ならずとも、いやむしろモノに不得手な人も多い昨今の考古学界の末端にもコト重視が拡がり、その余波は1990年代頃から理論化の波となって押し寄せているが、『理論考古学』において安齋氏は、全世界の研究を博搜して人類史の叙述を試み、低位・中位・高位の諸段階を具備した一貫性のある歴史像の構築をめざした。

しかし252ページから巻末の318ページにいたる「第三章 日本列島の文化の発現」では、相沢忠洋・藤村新一両氏を併記し、藤村氏の発見資料に全面的に依拠した記述を行った。このためその努力のほとんどすべてが、「捏造」の発覚によって水泡に帰した。

安齋氏は同書で、「すべての文化、社会、集団にはその起源神話があり、それによってその構成員の特別な地位が正当化されている。日本考古学の形成過程で、エドワード・モース、坪井正五郎、鳥居龍蔵、浜田耕作、後藤守一、梅原末治、末永雅雄、山内清男、直良信夫、森本六爾、和島誠一、小林行雄、藤森栄一、杉原荘介等にまつわる「神話」が、特定の目的のために事実をゆがめることによって作られている。」とのべ、ホイッグ史観の弊害をのべているが、一方、「この「前期旧石器」調査の隆盛は、関連石器のほぼすべての発見に関与している石器文化談話会の藤村新一の存在がなくてはあり得なかったかもしれない。藤村の「異能」はいまや周知のこと」であると持ち上げ、無意識のうちに「神話」叙述に関与した悲劇的内容となってい

るのは興味深い。つまり日本の理論考古学への志向は、本格化へ歩み出したのと同時に大きな陥穽に陥ったのである。安齋氏はその後、『理論考古学入門』（2004）で「〈アルケオロジー〉が導入されたとき以来、“古物”の学であるのか“考古”の学であるのか、言い換えれば、「モノの考古学」であるのか、「コトの考古学」であるのか、二つの考え方が対立するように日本考古学の底流にあった。しかし、両者は対立する事ではなく、相互のあり方を映し出す合わせ鏡のような関係にある。その「モノ・コトの考古学」を理論考古学と呼ぶことにする。“理論考古学とは、これまでの思考の枠組みに縛られない、まったく新しい「新しい考古学」の創造の可能性を探るための、考古学における〈理論と実践の可能性〉についての理論的考察である”と改めて宣言し、その展望を示したが、この書のどこを見ても、捏造問題にかかわる遺跡や研究者の記述は微塵も見出すことはできない。その完璧な叙述は、完全犯罪をもくろむ証拠隠滅めいている。

なお旧石器研究では、鹿児島湾北半部にあった火山から、約24000年前に起こった史上最大級の大噴火によって噴出された始良Tn火山灰(AT)の発見により、日本列島の広域に降り積もっているこの火山灰層を画期として、それ以降とそれ以前で大きく石器の様相が異なることが明らかにされている。そしてこれはそのままそれぞれの研究者の志向の違いに直結している。大雑把にいうと、降下以降の資料に取り組んでいる研究者はいうなれば「モノ」志向で、オーソドックスで手堅いのに対し、降下以前の資料に取り組んでいる研究者は、その対象が古ければ古いほど「コト」志向が強いという違いがあるらしい。そして捏造問題の発覚以前から、前者は後者を空想家とみなし批判する傾向があった。

ところが安齋氏は、「石器群の変遷を細かに見れば、この自然災害をもって時代の画期とすることにはいろいろと問題が残る」と述べ、石器群の構造変動論的認識に立てば、変化はAT降下直前にすでに起こっていたとして、AT画期論に否定的な立場から叙述を進めている。それはATという壁を挟んで対峙していた両者の融和を目指しているかにみえる。しかし意地悪な見方をすれば、捏造問題で難民となった後者が、大挙して前者の領域に流れ込んでいる状況を合理化している見えなくもない。それはまるで、敗戦によって日本の植民地支配が破綻し、その欺瞞が露になったことと、引揚者たちが大挙して帰国し、焼跡世代が形成された状況とよく似ている。ここで蛇足ながら付け加えておくと、榎木野衣氏の問題作、『戦争と万博』（2005）が脳裏をよぎる。すなわち鷺田清一氏の的確な評論を引くと、「長らく批評のタブーとなってきた「万博芸術」を解剖してゆくうち、この批評家は、地下に埋められた驚くべき配線の数々を見いだす。丹下健三をはじめとして大阪万博の主力となった建築家たちが戦時中の「大東亜建設記念造営計画」に加わっていたこと。万博事務局に旧満州国の行政スタッフが採用されたこと。これはまさに、捏造問題が総括されないまま、その中心に居た人々によって、一見そのおおもとの姿をとどめない形で、再生される可能性を暗示している。私のような「モノ」偏向の人間が、理論考古学の行末に漠然とした不明瞭な何かを感じ、疑いをぬぐえないのも、故無き事ではなさそうである。

ここまで深読みしなくても、危惧すべき状況はある。聞くところによれば、一部の国公立大学では、指導教官自らが奨励し、実際のモノを見ず、他者の収集した情報を再加工し、てっとりばやく博士論文を書かせるというスタイルが増えてきたらしい。すると学生が資料収集や調査にうつつを抜かすことを戒め、「たかだか数例の」資料の追加に腐心するよりも、教室の中で理論化やモデル化で勝負せよと指導していると聞き、驚かされた。

そうした論文の多くは、非常に洗練されている反面、モノとの格闘を避けている印象もうける。資料と向き合うことを基本とするはずの考古学のこうした現状は、果たして欧米の研究水準に追いつく為には避けて通れぬ道なのであろうか。

伽耶ブームにみる「モノからコトへ」

1970～80年代、申敬徹氏らによって釜山市周辺の福泉洞古墳群が調査され、更に1990年代の金海大成洞古墳群の調査によって、伽耶地域の5世紀の通時的様相が明らかになってきた。4世紀末～5世紀初頭の高句麗南下に伴う北方騎馬武人文化の移入、そして伽耶文化の遺物相にみる5世紀前半と後半の大きな変化、金海から高霊への政治的中枢の移動が構想された。当時大阪大学に留学していた朴天秀氏はこの成果を受け、日本古墳時代中期における新旧二相は、高句麗南下を含めた伽耶地域の政治的変動と連動していることを明らかにした。これと時を同じくして伽耶文化展が開催され、日本の古墳時代研究者の間に空前の伽耶ブームが到来した。任那日本府論を払拭し、伽耶地域の主体的歴史像を確立したこれら一連の動きは、まさにモノ研究がコトの転換を成し遂げた好例といえる。

近年はまた、朝鮮半島で唯一前方後円墳が集中して築造されている全羅南道の栄山江流域の調査が進展し、それらの古墳に「墳周土器」と称される「埴輪もどき」が配列されていること、栄山江流域の土器が6世紀前半の日本各地の遺跡から出土することも明らかになってきた。「任那四県割讓」問題にかかる倭と慕韓の関係が注目されている。

この問題は九州の考古学への影響も大きい。大分県日田市の朝日天神2号墳は、全長100mほどの前方後円墳で、大分県下の6世紀の古墳としては最大規模を誇る有力首長墓だが、この古墳の周囲に配列されていた徳利形の異形の形象物は、「須恵質埴輪壺」などと呼称されるが、それは韓国で「墳周土器」と呼んでいるものとほとんど同一で、列島で自生したとは到底考えられないものである。すると豊後の6世紀像を描くにあたっては、朝鮮半島南西部との通行と、その背後にある複雑な国際関係の解明を進める必要があるのである。

これらの研究に共通することは、従来の知見にない新しい考古学的成果が知られるようになって特定地域や時代の再評価が進み、それと文献史学の成果と対比され、古代史研究全体が共有できる新たな歴史像が提示されてきたという流れである。

しかしその一方、考古資料の蓄積がある段階で固定化・標本化されひとつの歴史像を結んだとしても、絶え間ない資料の追加とともに、次第に実態と乖離していく事実もある。

資料フィードバック機構の硬直化

心ある20代の若手研究者は、限られた資料から構築した歴史像を、文献史学の成果に引きつけ、補正につぐ補正を繰り返してきた過去の考古学研究にも、厳しい目を注いでいるように思える。コトの前提が、モノの分析を歪めてきた経緯を冷静に見据え、コト志向の有効性を疑問視しているのであろう。考古学は異常に新陳代謝の激しい学問である。文献史学の多くが、限られた資料の解釈を変化させることで学史を構築しているのに対し、考古学では絶え間ない発掘作業で、次々と新たな資料が追加される。ところが90年代以降の資料の爆発的追加は研究者の分析速度を上回り、資料を分析し解釈にフィードバックする機構がくずれてきた。既存の解釈や議論を固定化し、これに適合するよう資料を叙述するという逆転現象も一部で起きはじめている。

しかし待ってほしい。事実を理論に優先させるのが経験科学の原則であるはずである。問・仮説としての理論をたずさえて現象に向かいつつも、事実によって理論を修正して行くというのは、歴史学だけでなく、すべての経験科学の基本的な方法である（澤田昭夫1983）。よって豊かな新資料は、あらゆる通説・定説に対する反証をも提示し、いかなる古典的学説をも無批判に肯定しえるものではないことを雄弁に物語るはずなのである。

また分析手法の多様化は、資料の記述方法を高度化させているが、その一方、それらの個別分野の専門家が介在せずには、彼らの要求する精度の叙述が難しいという現象も呼び起こしている。さらに過去の学史的成果の論拠となった資料（日本に限らず、韓国や中国のものも含まれている）の再吟味の必要性も強く主張され、若手研究者のなかには、精度の高い再資料化を通じてさまざまな新知見を示し、名をあげた鈴木一有氏のような人物もいる。鈴木氏の一連の仕事は、問題意識の不足による見落としや、思い込みによる歪曲をはらんだ既存の資料化の精度に無批判に依拠することが、いかに危険かを教えてくれた。

現在の考古学、とりわけ日本の考古学では、出土するほとんどの遺構や遺物について、分類や編年が行われている。その精度や進捗は一様ではないが、記載方式も検索方法も大勢は決し、研究のフロンティアは失われ、敷かれたレールの上を走るだけの状況にある。

こうしたルーティンワーク化は、業績主義による過剰な効率重視とともに、新しい資料論の芽を摘む側面がある。もともと日本の歴史学の弊害として、研究法の習熟重視が自己目的化し、目的を欠いた惰性的な研究が多いという状況があったが、かといって十分に原資料を検証しない安易な理論化志向も、目的と方法の乖離の弊害はかわるところがない。

考証と実証

ウンベルト・エーコ原作、ジャンジャック・アノー監督になる『薔薇の名前』の映像化に当たっては、修道院や書庫、写本、料理、巨大なシャンデリアなど細部に至るまで緻密な考証が行われた。そこに当時のアナルの総帥であったジャック・ルゴフの協力があったことは有名である。フランスで刊行されたアッシュト版や、イギリスのオスプレイ出版のメン・アット・アームスシリーズなどの歴史絵本に、極めて緻密な考証によるイラストがちりばめられていることも、アナルやその周辺の活動の余波といえるであろう。

筆者もしばしば、そうした作業の機会がある。その代表的なものが博物館の展示、特に復元展示の実践である。

発掘で出土した資料は、多くの場合破損や錆で本来の姿が損なわれている。これらの錆を落とし、欠損部を補填し、脆弱化した部分を強化することはもちろんだが、通常は形態の復元にとどまり、それらが機能していた時点の強度や材質を取り戻すことはない。

しかしモノを過去世界の脈絡に戻していくには、当時と同じ強度や機能をそなえたものを、劣化する以前の本来の材質と当時の製作技術で再現することがもっとも説得力がある。

そうした作業を実現するには、理化学的分析を含めた材質の特定、観察による構造の解明、製作技法の解明、設計と材料の選定、実際の使用実験などが不可欠である。

もちろんそうした作業は、考古学者や歴史学者だけではできない。工芸技術の専門家（＝職人さん）がそれぞれの専門知識を駆使し、妥協を排除しつつも協業する必要がある。ややもすれば平板な考古学の資料調査と異なり、緊張感と創造的な雰囲気共存する独特なものである。例えば馬具の復元では、鞍や鐙など基幹部品は木工職人が担当し、木材の選択や加工にあたる。轡や杏葉、鞍や帯の装飾金具は金工職人が担当し、金属の選択や鍍金・象嵌等を含む加工にあたり、冷鍛造・熱鍛造、鑄造等を使いわけると。これに皮革や漆などの工芸技術を加味し、総合的な工芸作品としての馬具が完成する。

筆者は過去そして現在、福島県埋蔵文化財センター白河館「まほろん」が行っている出土品の復元製作委員会に馬具・馬装復元の専門家として参加している。このメンバーには、金工史家で古代の技術の研究で知られる鈴木勉氏、そのよきパートナーで江戸っ子職人の松林正徳氏、職業訓練校で木工技術を指導するかたわら、馬具の木質部の製作にあたる河井良三氏、などの人々が参画している。

私がこの委員会に入ってまず面食らったことは、全体の設計を要求されたことであった。考古学では普通、遺存度の高い金属や無機質部分の叙述に意を払い、残存部品の形状と材質を正確に記載することを資料化と考え、それらの類例を集成して分類・編年することを研究と称してきた。そしてそこに付着した木や布の残骸から、腐ってなくなってしまった有機質の部分が確かにあったらしいと叙述することで満足してきた。復元図も、まあ挿絵程度のもので、復元についても、合成樹脂などでその形状を模するにとどまっていた。

しかし古代の馬具を全く同じ素材・製作技法で再現するという事は、銅板や鉄板の金属組成、素材の形状や厚さ、その鍛造や透かし彫り手順やそれに用いる工具、金メッキ、革帯や布帯と金属部品のリペット結合、木材の選択と加工など、極めて複合的・総合的な知識と工芸技術が要求される。そして一癖も二癖もある研究者と職人集団を力技で統括する度量を持った、プロデューサーの存在が不可欠となる。

つまり専門工芸技術者との協業による古代工芸の復元制作は、考古学による資料論の限界を打ち破る、きわめて創造的な試みであるといえる。博物館展示を業者に丸投げにする学芸員の怠慢を排し、異業種協業を実践していくことは、考古学資料のあらたな資料論を開拓していくうえで、最も有効な方策のひとつであると考えられる。

古墳時代中期・後期は「初期国家」か、「初期中世」か？

古代の生産関係や集団内関係の段階的変化による歴史叙述と、「モノ」に基づく理解はしばしば一致しない。筆者の専門とする古墳時代騎馬文化の理解ではことに顕著である。

日本における文献史学を中心とした国家形成論では、エンゲルス学説の適用を通じ、日本列島における国家の確立時期は、律令制の開始される7世紀後葉前後とみる見解が強く、かつ国家前・国家を二項対比で捉え、その境界をどこに置くかに議論が集中してきた。これに対しさきごろ大阪大学を退官された都出比呂志氏は、3世紀以降の古墳時代を「初期国家」、7世紀後半以降の律令期を「成熟国家」と規定し、国家形成にいたる長期の移行過程を明らかにしようとした（都出1998）。またエルマン・R・サーヴィスの四段階進化階梯を適用し、部族社会（tribes）や首長制社会（chiefdoms）、原初国家（primitive states）などにあてる見解もある。しかしこれらは、極めて総合的な分析を通じて導かれたもので、実際の考古資料の操作とは、埋め難い懸隔があるように感じられる。

これに対し古墳時代甲冑や馬具の系統研究に先鞭をつけた穴沢和光氏は、その語学力と該博な知識を駆使し、ユーラシアの東西を繋ぐ一大文化系統論を提示した。すなわち東アジアの3～4世紀（後漢末・三国～五胡十六国）における騎馬文化複合と、ヨーロッパの民族大移動期から初期中世にかけての文物を対比し、両者がよく似た内容を示していることを指摘し、その背景にある中央アジアや西アジア・東ヨーロッパにおける民族移動や文化接触の可能性を示唆した（穴沢1988）。東アジアの初期騎馬文化にみる甲騎具装は、ギリシア・ローマ古典古代よりはむしろ、初期中世に対比すべきものであり、蛮族文化からキリスト教への移行も、重装騎馬戦術の普及と連動する東アジア仏教の世界展開とも、奇妙に一致している。こうした事実は、今後あらたな視角を開くのだと思われる。

おわりに

本論は2005年7月16日に行なわれた九州歴史科学研究会/西欧中世史料論研究会共催のシンポジウムの席上で口頭発表した際、配布したレジュメの文章に、若干の添削を行ったものである。突然の依頼に当惑し、参加者の関心に沿わないだろうと思えたが、列席された諸氏の寛大で暖かい反応をいただき、かつ異なる分野のかたがたと親しく歓談できたことは、思いがけない喜びであった。本論執筆の機会をいただいた主催者の諸氏に御礼申し上げ、結びとしたい。

主要参考文献・註釈

- 穴沢和光 1988「蒙古鉢形と冑と四一七世紀の軍事技術」『斎藤忠先生頌寿記念論文集・考古学叢考』（中）pp.723-774.
- 安齋正人 1994『理論考古学—モノからコトへ—』柏書房
- 安齋正人 2004『理論考古学入門』KASHIWA 学術ライブラリー06
- 川西宏幸氏 2000「同型鏡考—モノからコトへ—」『筑波大学先史学・考古学研究』11号
- 澤田昭夫 1983『論文のレトリック わかりやすいまとめ方』講談社学術文庫 604
- 都出比呂志 1998『古代国家はこうして生まれた』岩波書店
- 桃崎祐輔 2002「6 策内 37 号墓出土馬具から復元される馬装について」「福島県内古墳時代金工遺物の研究—策内古墳群出土馬具・武具・装身具等 真野古墳群 A 地区 20 号墳等、金銅製双魚佩の研究復元製作」（復元製作プロジェクトチーム）『福島県文化財センター白河館 研究紀要 2001』pp. 36-74. （Web 上でも公開）
- 桃崎祐輔 2005.3. 「馬具研究の現状と課題」『七隈史学』第 6 号 七隈史学会 pp. 129-144.

歴史学と映像資料 —アーカイヴ・公共性・ドキュメンタリー—

西谷 郁

はじめに

本研究は、歴史学と映像資料との関係をめぐる問題を概観し、歴史学において映像資料がいかに活用され実践されるのか、考察する。

映像資料の定義は、テキスト、写真、絵画をはじめ、映画、ビデオ、デジタル資料など幅広い。したがって本研究では、特に映画やビデオなど動く映像の資料に限定し論じる。

歴史学関連の研究・教育現場や国際・異文化交流の場において、近年、映画やビデオは、映像資料、ドキュメンタリーとして、「雪解け」が進む 1980 年代以降、注目され活用される機会が急速に増えた。映画、映像の DVD 化による利便性の向上や、一次資料の品質を保存するデジタル技術の発達、その背景として考えられる。しかしこうした映画、映像資料の充実が進む一方で、個人情報保護法や著作権、肖像権をはじめとする、記録する行為そのものの問題、記録した資料をいかに収集、整理、保存、公開するのか、という映像アーカイヴ (archive) 運動に関する問題が生じている。

そこで、本研究は、アーカイヴ運動、公共性、ドキュメンタリー、3つの側面から、歴史学と映像資料に関する諸問題を概観し、一人一人がいかに映像資料を活用し、歴史学研究の実践へと結びつけることができるのか、その展望を示したい。

1. 映画の資料的問題 ～フィルム・アーカイヴの国際的な協力関係～

映画は、人々の日常生活や戦争など、政治、文化、社会のあらゆる場面を映し出し享受されてきた、20 世紀を代表するメディアである。しかし、映画は必ずしも、あらゆる人々に対して、自由かつ容易に享受され利用されるものではなかった。なぜなら、映画誕生以来の約 100 年間、世界の映画市場は、その約 80% をアメリカによって支配され続けているからである¹。映画は「ソフト・パワー」²と称され、アメリカを代表する文化資本産業として圧倒的な影響力を世界に及ぼしてきた。

こうしたアメリカによる映画の経済性を重視する動きに対して、映画の文化、芸術、政治性を重視するフィルム・アーカイヴ運動が登場した³。その中心

¹ 「我らの聖地 ローカル@グローバル」2005 年 1 月 1 日、朝日新聞。

² ジョセフ・S・ナイ/山岡洋一訳 (2004) 『ソフト・パワー』(日本経済新聞社)を参照。

³ 「フィルム・アーカイヴ (映画の保存所)」の定義は、映画フィルムを破損・散逸から救済し保管し、必要な保存、修復、復元処置を施して、適切な情報化と公開事業を行いつつ、これを文化遺産として、また、歴史資料として安全かつ適正に次世代へ継承させることを責務としている機関・団体のことである (岡島尚志, 1995a, 「FIAF

である国際フィルム・アーカイヴ連盟（「FIAF (Fédération Internationale des Archives du Film)」、以下、FIAF)は、1938年に国際団体として結成され、現在、約60カ国、約100以上のアーカイヴ団体や映画会社、研究機関等が加盟している。

FIAFは、その創設以来、アナログ、つまり手作業による映画の収集、修復、保存、公開など、文化的、歴史資料としての映画の役割を重視してきた。しかし、21世紀になり、いわゆるIT革命が進展すると、デジタル技術に関する長所と短所が議論されるようになった。

2000年に東京で開催されたシンポジウム「フィルム・アーカイヴの仕事：再定義」⁴では、フィルム・アーカイヴの諸活動において、デジタル技術を導入することで、活動の効率化や簡素化、経費削減、インターネットを利用した上映と広範なアクセスなどが、新たな問題解決方法として示された。

しかし、デジタル技術やシステムを導入できる機関は、資金調達が比較的容易な欧米先進国に限られている。つまり、フィルム・アーカイヴ活動におけるデジタル技術の推進とは、アメリカ主導で進展しているのである。今後は、アジアやアフリカ、オセアニア、南米など非先進諸国において、公的機関・非営利団体やユネスコなど国際的なアーカイヴの連携と協力体制の確立が重要である。

2. 公共施設・機関（図書館・博物館等）と映像資料

現在、日本においてFIAFに加盟している機関は、東京国立近代美術館フィルムセンターと福岡市総合図書館の2つの機関のみである。従来、日本において映像資料の一般的な収集、保存、公開などの業務は、図書館、博物館、美術館など映画・映像資料を専門としない、各公共施設の一部門として行われてきた。

1980年代以降、日本図書館協会（以下「JLA」）が中心となり、全国の公共図書館において、映像資料を視聴覚資料として、図書館活動の一環に位置づけ重視し始めた⁵。そうした視聴覚資料のほとんどは、著作権処理済ビデオをJLAルートで全国の図書館に頒布する方法がとられている。しかし、著作権処理済ビデオのタイトル数には限界があり、図書館以外での利用が禁止され、その実用性と充実性は十分ではない。

さらに、社会史、文化史、生活史、地域史、個人史、民衆史など、歴史研究において、家庭用映画やビデオの役割や資料的価値が、今後益々重要視される。この問題に対処するため、今後は、歴史学など学術分野と公共施設と

とは何か？」『[東京国立近代美術館フィルムセンター] NFC ニューズレター』1995年7-8月号, 2号, 東京国立近代美術館, 2p)。

⁴ 『[東京国立近代美術館フィルムセンター] NFC ニューズレター別冊「フィルム・アーカイヴの仕事：再定義」』（2003年, 東京国立近代美術館）を参照。

⁵ 1980年代から視聴覚資料の重要性が、『図書館雑誌』『情報管理』等の研究誌で掲載されはじめ、1998年日本図書館協会に映像事業部が設置された。1999年JLA視聴覚研究会設立（日本映像ソフト協会など参加）し、機関紙『図書館と映像資料』が創刊され、図書館における映像資料の活用が近年、活発に議論されている。

が密接に連携し、映像資料を十分活用するための理論と方法を確立する必要がある。

3. テレビの問題 ～NHK・公共性～

日本における映像資料とアーカイヴ活動は、テレビ局、とくに日本放送協会（以下、NHK）主導で行われてきた。国営放送ではなく公共放送組織として、第2次世界大戦後、日本における「表現の自由」と放送・映像技術開発を維持し続けてきたことに対するNHKの貢献は非常に大きく、世界的評価も高い。しかしNHKの公共放送としてのアーカイヴ活動は、一般の人々に十分反映、貢献されているのか、その公共性は機能しているのだろうか。

テレビ放送開始30年を向かえたNHKは、1982年「放送文化財保存問題研究会」を結成し、民放・NHKの統合的資料収集と、国民のための開かれたビデオ・ライブラリーを目指す方針を出した。しかし、その利用は各放送局内に限られていたため、一般に開かれたライブラリーを目指し、2003年、埼玉県にNHKアーカイヴスが設立された。この埼玉県のアーカイヴスを拠点に、全国各都道府県のNHK放送局内に、無料利用が可能な「NHK番組公開ライブラリー」を現在設置が進んでいる。

しかし、NHKと政界・官界との関係に見られる公共性、信頼の欠如という問題が昨今浮上した。2004年、某代議士とNHKによる番組内容の変更疑惑、受信料不払い、予算確定の不明瞭さ、NHK職員の一連の不祥事などである。NHKの公共性、ひいてはNHKのあり方そのものが問われている今、積極的なアーカイヴ、ライブラリー活動をとおして、NHKが視聴者に開かれた民主的かつ真の公共放送たることを切望している。

おわりに ～歴史学とドキュメンタリー～

歴史学と映像資料との関係を、フィルム・アーカイヴ活動、公共施設、テレビにおける問題を概観し、諸機関の協力と連携が重要であることを明らかにした。では、歴史学において、映像資料を活用、製作、収集、整理、保存、公開する際の実践的問題とは何か、歴史学と映像資料との関係はいかに発展しうるのか。歴史学とドキュメンタリーとの関係から考えたい。

ドキュメンタリー作家の森達也は、「できあがった作品が客観的な事実などであるはずがない。多面的な現実から主体的に選択された一つの視点であり、描かれるのは紛れもなく作り手の主張であり、世界観のメタファーなのだ。絶対的な事実を敢えて再現するならば、手法としては定点に置いたカメラによるワン・カットの隠し撮りしかない。しかしこれはもはやドキュメンタリーではない。ただの映像だ」⁶と述べている。映像資料に関する各学術専門分野におけるビデオ・カメラを用いた調査対象者・対象物と調査者との関係は、調査・研究者の真摯な態度に委ねられている。調査・研究者は、映像資料製作に関する主体性と客体性、映像資料とドキュメンタリーとの差

⁶ 森達也「多面的な世界で『真実』をつかむために 現代ドキュメンタリー考」『Inter Communication』No.44, Spring, 2003, 78p.

異などの諸問題に対して、細心の注意を払い十分考慮した上で、映像資料製作と活用に臨むべきである。製作された映像資料の諸活用・保存方法については、映像資料アーカイヴ、公共施設、テレビ、特にNHKなどの諸専門機関とアカデミズムとの密接な協力関係の構築が最重要課題である。

IT革命により、日常生活に深く浸透した映像資料は、すでに欧米や韓国において、映像アーカイヴの目録学も確立されるなど、アカデミズムの基礎知識として広く共有されている。日本では、これまでNHKがその役割の中心を担ってきたが、今後、日本の映像資料に関する各学術専門分野の横の連携と協力関係が早急に構築されるべきである。

史料論のいま —口述史料と歴史研究の民主化—

宮本 なつき

口述史料の利用は古代ギリシャから行われており、決して新しいものではないが、1960年代頃から口述史料が歴史研究及び叙述に頻繁に取り入れられるようになり、「オーラル・ヒストリー」という言葉も浸透してきた。にもかかわらず、依然として文書史料をより重んじる傾向がある。報告では、ポール・トンプソン著/酒井順子訳『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』（青木書店、2002年）を参考に、口述史料の信頼性とその特徴について、更に口述史料がもたらす歴史研究の民主化について論じた。

I. 口述史料に対する批判

まず、口述史料に対する批判として、人間の記憶「語り」に対する信頼性があげられる。しかし、文書史料に関しても同様の問題があり、特に文書史料の場合、主な書き手が男性であるため、ジェンダー・バイアスが大きく影響してくる。また、外交史料は政府の望む内容になっていたり、自伝も私的なことを避けたり、と公開されることを意識しているため、語られていないことの存在を意識する必要があるだろう。社会統計でさえ、当時の社会的視点や圧力の影響を考慮しなければならない。

トンプソンは、「歴史家が最も重視する種類の証拠」は、「意図せずして、そして自覚せずして、個人、あるいは組織が具体的な活動をしている間にこっそりと隠されて、後世に伝えられてきた文書の形式をとった一種の一次資料」であり、「話された言葉より書かれた言葉を好む迷信のような偏見こそが問題である」と指摘している（トンプソン 2002年、228頁）。語り手の視点を尊重しつつ、史料の中に一貫性を探ること、他の史料と照らし合わせて確認すること、バイアスの可能性を考慮に入れることは、文書史料でも必要なプロセスであり、どちらに信憑性があるかではなく、文書史料と口述史料は相互補完的な関係であり、文脈に応じてより有効な史料を使うことが求められる。

また、口述史料に対する信頼性に関して、以下三つのことが言える。まず、インタビューは聞き手と語り手の出会いの正確な記録であり、録音も可能であるため、ユーモアや偽り、不確かなニュアンス等を含んだ話された通りの言葉が存在する。更に、その場で聞き返し、掘り下げて質問することもできるため、双方向的かつ能動的な史料ともなる。これに対して文書史料は、書かれている記録以外の事実を発見することができず、掘り下げていくこともできないため、受動的な史料といえるだろう。

第二に、批判の対象となる記憶であるがゆえの「ゆがみ（思い込み・誇張されたこと・語られなかったこと）」を見るのも、口述史料を解釈する方法の一つであり、近年は社会学の方法でナラティブ分析としてよく用いられて

いる¹。真実でないことと偽りとは別のことであり、間違っていたとしても、その社会的意味や歴史的意味を明らかにすることがオーラル・ヒストリーの重要な一側面でもある。「ゆがみ」を語り手の心理と社会的態度を理解するヒントとして捉え、語り手の上のしかかっている社会的圧力を繊細に捉えることができ、またそうできる力をオーラル・ヒストリー研究者は持つべきである。

第三に、口述史料の場合、史料収集と史料批判を同時に行うことができるため、より信頼性のある史実を得られるということがいえる。一人でも質問を繰り返し聞くことができるだけでなく、ある体験を共有した人々を集団で討論させ、相互に史料批判をさせると共に個人にまさる集団の記憶力を利用することができるのである。

II. 口述史料の特徴

口述史料の特徴として第一にあげられるのは、エリートや支配者層の体験が反映されていることの多い文書史料には登場しなかった人々の体験や日常生活を明らかにすることができることである。労働や娯楽、犯罪、社会移動等、文献資料には出てこない「下からの歴史」を考察する際、口述史料は大変有効であり、社会史や民衆史、女性史、移民史といった研究分野は、口述史料の利用によって近年大きく発展してきた。

また、「語り」の臨場感や迫真性、直接性が歴史叙述に生彩を与え、当事者の声をして語らしめることで、事実や体験の重みを伝えることができる、日常を時系列的に追うことで、マクロな社会構造やその変動を個人がどう認識し、選択し、行動したかを明らかにできるといった点も挙げられる。人々が社会において問題をどのように捉え、どう生きてきたかを人々の視点と語りから見るのであり、そのことについては、次に詳しく説明したい。

もう一つ、オーラル・ヒストリーは歴史研究の民主化に役立つという社会的機能をもっているが、そのことについては、次に詳しく説明したい。

III. 歴史研究の民主化

トンプソンは著書の中で、オーラル・ヒストリーの示す可能性として、民主的な歴史への流れを挙げている。これまでの歴史研究は、普通の人には難しく、取り組みにくいものであったが、インタビュー形式のオーラル・ヒストリーは、誰でも取り組むことができ、個人が自らの歴史を取り戻し、書く事を可能にした。社会的地位を問わない様々な個人によって、新たな史料が生産されるようになったのである。

また、オーラル・ヒストリーは、聞き手と語り手の共同作業であることから、お互いが民主的な協力関係にある。聞き手が語り手を選び、質問事項を決める点では、語り手は受動的だが、史料生産の工程は相互干渉にある、つ

¹ 日本国内の代表的な研究に、奥村和子・桜井厚編著『女たちのライフストーリー：笑顔の陰の戦前・戦後』（谷沢書房、1991年）、桜井厚『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』（せりか書房、2005[2002]年）、中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』（弘文堂、2002[1997]年）等が挙げられる。

まり、語り手は聞き手の質問に答える存在から、質問について考えることで新たな自己を見出して質問を超えた語りを発し、それに応じて聞き手も問いを修正することができるのである（安村、115頁）。

さらに、その研究成果を地域に様々な方法で還元することができる。史料の整理保存については、まだ発展段階にあるが、録音されたインタビューを用いてドキュメンタリー番組を制作したり、インターネット上で公開するなど発表方法は多様化した。例えばアメリカ議会図書館は、口述史料を用いた歴史教育・研究（*American Life History, American Folklife Center*）を促進しており、普通の人々の生活や体験も重要な文化遺産として捉えている。現在でもコミュニティ単位で、民謡や民話、子供の遊び、料理のレシピ、宗教や信仰、職業、民具といったことに関する様々なプロジェクトが行われている。

アメリカは大恐慌時代（1930年代）に、ニュー・ディール政策の一環として失業した作家や研究者、教師、写真家などに雇用を与える *Federal Writer's Project* を行った。ここでは、“*democratize American culture*”（アメリカ文化を民主化する）という目的で、女性、ネイティブ・アメリカン、元奴隷などあらゆる階級の人々の日常生活を記録に残すため、インタビューを行い、人々に家族、教育、職業、宗教、不況の感想などについて語らせている。現在では、当時行われたインタビューを書き起こしたものと実際の音声、及び写真をネット上で公開し、誰でもアクセスすることができる。

さらにトンプソンは、オーラル・ヒストリーには歴史を書く上での方法としての側面と、より広い意味での人間形成のための手段としての側面が併存していることにも着目している。階級間、世代間の対話的な相互交流から相互理解が生まれ、両者が一つの場所あるいは時代に所属する感覚を育てることができる、つまり、「オーラル・ヒストリーはより全的な人間を生み出す」のであり、「歴史の社会的な意味を根底的に転換する手段を提供する」のだ（トンプソン 2002年、49頁）。例えばニューヨークの「中華街史プロジェクト」は、高い政治意識をもって、既に定住していた移民と新移民との、またコミュニティのボスと低賃金の洗濯労働者たちとの相互理解を深め、それぞれがお互いに理解を示すようにして、民主的なコミュニティ構造作りを支援することを目的としており、民衆運動的側面も持ち合わせている（トンプソン 2002年、277-378頁）。

これまで見てきたように、事実を認識するための一つの要素であることを意識し、十分な史料批判を行うことによって、口述史料は文書史料同様重要な歴史史料となる。口述史料の利用は、歴史の複眼的な見方を可能とし、コミュニティと歴史を結びつけるという結果をももたらすのである。

参考文献

フィリップ・ジェタール「オーラル・ヒストリーー過去 25 年間の方法論および研究の総括」『歴史学研究』683 号（1994 年 4 月）。

ポール・トンプソン、酒井順子訳『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』青木書店（2002 年）。

――、聞き手・翻訳酒井順子「ポール・トンプソン氏に聞く オーラル・ヒストリーの可能性を開くために」『歴史評論』648 号（2004 年 4 月）。

広川禎秀「日本における近現代史研究とオーラル・ヒストリー」『歴史学研究』683 号。

安村直己「オーラル・ヒストリーの問いかけるものーポール・トンプソン『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの世界』の一つの読み方ー」『思想』959 号（2004 年 3 月）。

ウェブサイト

The American Folklife Center, <http://www.loc.gov/folklife/>

American Life Histories: Manuscripts from the Federal Writer's Project, 1936-1940,
<http://lcweb2.loc.gov/wpaintro/wpahome.html>